

Hughes, R. (2011). Teaching and Researching Speaking
Chapter 4 (pp.80-96) Issues in assessing speaking

4.1 Introduction

Quote(以下 Q.)4.1: No two listeners hear the same message.

- スピーキング評価の開発は、言語テストと密接な関わりをもってきた。言語テスト開発は特に WW II の間など、政府・軍の必要性から実用性が重視され、1980 年代までは、言語評価の実践と理論は言語学の領域外で開発されてきた。

Q4.2 The difficulty of oral testing

- 1970-1980 年代は、特定の談話を言語の普遍性に一般化することが注目された。言語理論では、普遍文法などの複雑な構造分析をし、言語テストでは言語の複雑性を、相(facets)に集約し、多肢選択問題などの簡易な形式が表れた。
- 言語テストは、影響力のある IELTS, TOEFL などの国際的な言語テスト組織からの影響も受けた。主要テストは教室内にも影響力を持ち、教師はテストのために教え、良い得点をとれるスピーキングパフォーマンスが、高評価されるなど、負の波及効果も見られた。
- 学問領域では、1990 年代から 21 世紀初期にかけ、スピーキングテストは、話し言葉と書き言葉の違いの理解に影響を受けた。文化など多様な話者のスピーキング測定、lingua franca, World Englishes なども研究された。
- 測定に関しては、以上のような歴史的背景から、前期の実践的目標と、後期のより研究に基づいた言語教育、研究、測定の間、依然として対立が残っている。

Concept(以下 C)4.1: 測定に関連したスピーキングの領域 : Douglas(2004)はテストを含むコミュニケーション活動において、学習者が意識すべき点について以下 8 点を挙げている。Setting, Participants, Purpose, Topical content, Tone, Language, Norms of interaction, Genre. これらの点がスピーキングに与える影響を理解し、学習者が話す前により詳細な状況の情報を得ることが重要であり、教育、測定にも大きく影響すると述べている。

- 主観性とテストの相(aspect)の多様性からスピーキングテストの一貫性を保つことは、ライティングよりもずっと困難である。テスト状況によって変わる要因が多いためテスト開発者は、エラー数などより量化できる面に注目しテスト実施を抑制しがちである。良いテストは、客観性、反復可能性、一貫性を必要とするが、スピーキングはその 3 点に、常に疑念を投げかける。

4.2 Why the nature of speaking is a challenge for test designers

4.2.1 Understanding the construct

- テスト開発者はまず、「測定する構成概念は何か？」つまり、「何のテストか？」を問わ

れ、回答は「スピーキング」となる。しかし、スピーキングは多様であるため構成概念の定義は困難である。統計的に、カジュアルな会話は最も主要なスピーキングの形式であり、そのような **informal** な会話の中で新・旧情報の理解がなされる。しかし、本章の後半でも述べるように、日常会話(**everyday conversation**)は、主要なスピーキングテストで扱われる構成概念ではなく、話の創造性や情意面は基準とならない。

- スピーキングは、削除、編集が不可能で **planning** が困難な、処理の制約の中で行われるため、話者にとって重要な技能はその重圧を対処し、考えの流れを述べ、必要に応じて修正を行う事である。テストにおいては、口ごもった修正やまとまりの悪い発話よりも、流暢で完璧な発話がより高く評価される。

Q4.3 The state of knowledge about conversation:自然な発話に関しての特長として、話者自身が会話の典型的な構成と統制について気づいていないことである。

- 自然な発話において話者は発話の構造ではなく、伝える考え、感情、情報に焦点を当て、聞き手も話者の意見に耳を聞こうとする。しかし、テストでは発話に正確さ複雑さなどの言語面を重視するため、テスト基準と自然な発話の間に対立が生じる。
- **Q4.4** の例にもみられるように、母語話者でも、なじみのある題目について話す際においても言いよどみが多くみられ、その発話はテストの観点からは流暢な発話とは言えない。また、単語一語、まとまりのない発話が好まれる状況もある(**Q4.5** 参照)。

Q4.6 Testing criteria and changing attitudes to spoken language:以前の英語テストは **Queen's English** を標準としていたが、現在は英語の多様性がみられるように、将来 **EIL(English as an international language)** も確立化される可能性がある。

- 非母語話者の話す英語が世界で多く見られる中、テストは母語話者という狭い群の標準を用いるのかについて、答えは2通りある。第一に、テストの規範は世界の言語使用に応じて変化するが、慎重に変更が加えられるため時間差がある。第二に、より理論的な答えとして、話しことばは書き言葉ほど等質ではないため、テスト作成者は構造についての理解を反映させなければならない。さらなる視点として、母語話者の基準が実際に主要なテストの基準となっているかを、検証する必要がある。スピーチの規範の知識と、何が実際に測定可能なのかの、溝を埋めるための検証が必要である。

4.2.2 Formats and interactions

- スピーキング試験実施方法(受験者と試験官の接し方)もスピーキングテストに影響を与える。 **Direct, indirect, 2対2** など、様々な形式がある。(C4.2 参照)
- スピーキングで重要な技能は、聞き手が何を必要としているかを理解し、その必要性に応じてスピーチを適応させることである。しかし、テストにおいては、話し手は対話者ではなく、試験官に話さなくてはならない。

Q4.7 & 4.8 Speakers adjust to speakers:スピーキングは、聞き手に意図した効果を与える

ために、意味を交渉して調整する。Group discussion などでは、対話技能もみることができる。

- 良いスピーチコミュニケーションは話者が相手に影響を与え、話者間の反応の上で成り立つ。

Q4.9 The issue of test conditions and interactivity: 測定の際にテストは対話に制限を与え、それはテストパフォーマンスの一般化にも制限を与えることになる。スピーキングで成功するには、(a)タスクと役割(b)状況(c)個人の知識、を必要とする。

Q4.10 Fulcher on the issues on pairing test takers: (1)二人の受験者の関係性(L1,熟達度、正確 etc)、(2) 試験官の影響(受験者のみが評価されることの影響) ,(3)受験者をどの程度補助するか(4)テスト時間は測定するに十分であるか、(5) テスト形式が、受験者の不安感に与える影響。

- 録音された音声を用いたスピーキングテストは、全受験者に同じ聴覚・視覚的刺激を与えることができるという利点があるが、談話能力の中の対話の側面に欠けている。(会話方略、コミュニケーション障害の際の能力として、Q4.11 参照)
- スピーキングテストへの批判への対応として、テスト基準と自然な発話の間には避けることが出来ない違いがあるが、テスト結果とスピーキング能力に相関関係があるため、スピーキング能力を示すものとなっている、という研究も多くみられる。

4.2.3 Genres and skills

- スピーチがどのジャンルか、特定の分野についてか、また特定の目的のテストか一般テストか、についてもスピーキングテストでの論点となる。セミナー発表の様な情報提供か、自由な会話かによって言語の選択は異なるし、医療分野の発表ではより対話形式であったり、分野によっても話の形式は異なる。
- スピーキングテストを分野別にするには、採点者の再訓練が必要となり、より労力を要する。物語形式などでは形式的構造も見る事ができる。
- 統合技能テストと個別技能テストの区別も論点となるが、特に、リスニング技能とスピーキング技能テストの関係において特に重要である。リスニングとスピーキングは理論上切り離すことができないため、コミュニケーションスキルとしてリスニング・スピーキング技能を統合的にテストすべきである(Q4.14)、また一つのタスクは、各技能の一部のみしか測定できない(Q4.15)という視点もある。
- 個別技能テストが望ましいが、スピーキング・リスニングテストにおいては、理論上のみにおいて個別に実施可能である。筆記試験などは、採点が容易であるが4技能測定に最適なモデルとはいえ、スピーキング・リスニングを対話能力で測定するなどの方法が必要であるが、さらなる研究が必要である。

4.2.4 Linking performance within the test to performance outside the test

- テスト当日以外の状況での受験者のスピーキング能力を予測できるテストはなく、直接スピーキングを測定することは不可能である、という意見もある。しかし、主要な国際的テスト機関はスピーキングの構成概念を測定することに関しては可能であると説明している。
- Figure4.1 はテスト形式の特徴を要約している。例えば、対面形式は、統合的スキルを全体的に測定するのに対し、online のテストは細部をみる (atomised?) 方法など。